

令和 6 年 5 月 9 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00396

研究課題名（和文）北米と日本環境詩学の全体像及び理論構築に関する基盤研究

研究課題名（英文）Building the map and the theory of North American and Japan

研究代表者

高橋 綾子（TAKAHASHI, Ayako）

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：30435416

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：環境詩学の理論構築として、Routledge Companion to Ecopoeticsに“The Work of Reconnection, Japanese Ecopoetry by Rumiko Kora and Ryoichi Wago”を共同研究者のハレスキ教授との共同執筆、東アジア環境詩学の代表として掲載された。ハレスキ教授の講演会を獨協大学の原成吉教授をコーディネーターとして、2024年2月18日（金）に開催した。エコフェミニズムの詩人である高良留美子の詩作品を考察、検証した。高良留美子資料室において、アーカイブの収集、作品の背景をご子息竹内美穂子氏よりご教授を賜った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果物の災害詩の著書／翻訳 Wago Ryoichi Since Fukushima (Vagabond, 2023) はドミニカン大学教授 Judy Halebsky との共編著である。また同じく共同執筆の“The Work of Reconnection, Japanese Ecopoetry by Rumiko Kora and Ryoichi Wago”は、Routledge Companion to Ecopoeticsにおいて、東アジア環境詩学の代表と位置づけられている。環境詩学研究を基盤とし、災害詩研究の成果を世界に公表し、詩学研究及び環境文学批評に貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：Joint research with professor Judy Halebsky at the Dominican University of California has proceeded successfully. To improve and revise our translation, we participated in poetry workshops, 2022 Napa Valley Writer's Conference where other poets read and share feedback on the translations. The group aspect of working on a translation is helpful. Our translations have appeared three journals: Two Lines, Poetry Northwest, and Tokyo Poetry Journals. After the challenges of submitting our proposal, the translation manuscript was adopted by Vagabond Press in July, 2022 and finally published titled, Since Fukushima in February of 2023. Our joint article, “The Work of Reconnection, Japanese Ecopoetry by Rumiko Kora and Ryoichi Wago” appears in Routledge Companion to Ecopoetics in February of 2024. The article contributes to publicize not only our research achievement but also East Asia ecopoetics for worldwide critics and readers

研究分野：英語圏文学

キーワード：環境詩学 環境詩 災害詩 和合亮一 Since Fukushima 高良留美子

1. 研究開始当初の背景

人間が環境に与える影響が大きくなり、現在は気候変動に伴い様々な問題が世界中で起こり、科学者たちはそれぞれの立場からこの地球の危機を唱える。科学者パウル・クルッツェンは2002年の『ネイチャー』誌に掲載された「人間の地質学」で、「過去三世紀で、人間がグローバルな環境に及ぼす影響力が高まり、完新世から『人新世』という時代に入った」と述べる。ネイチャーライティング及び環境文学は、1980年代以降、環境問題への関心対応から主にヨーロッパやアメリカで議論されその結果生まれたジャンルであり、それらとともに環境と関係性を追求する環境文学批評が進歩を遂げている。環境文学批評の対象はノンフィクションと小説が先行し、本研究対象となる詩、つまり「環境詩」は、1990年代以降、イギリス、アメリカで議論が進み、2010年頃からようやく討議されてきた。しかしながら、万葉集以来、自然と親密な関係を持ち続けながら日本では、「環境詩」つまり「既存の詩学研究に生態学的、環境的な視点を組み込む」(Rigby, Kate 2009)を意識する傾向は意外にも低い。

環境文学研究は、北米ではローレンス・ビュエルが『環境的想像力—ソロー・ネイチャーライティング・アメリカ文化の形成』(1994)において、ヘンリー・ソロー研究から脱人間中心主義の想像力を見出して以来発展を続けている。日本における環境文学研究は、原爆や環境汚染を題材にした小説、ノンフィクション、絵本を中心に蓄積されている。一方、ジョナサン・ベイトがワーズワース研究を通して自然と詩学の関係性を論じて以来、「環境詩学」がようやく論議されるようになる。近年では、哲学者ティモシー・モートンの『自然なきエコロジー』(2009)において、英文学者のアンガス・フレッチャーの『アメリカ詩のための新理論 民主主義、環境、想像力の未来』(2004)から引用して、環境詩学とは「周囲や世界を取り巻いている感覚をくみ上げる方法、つまりアンビエントな感覚」つまり、人間、非人間に関わらず、その周辺との相互関係によって生じる感覚によるものであると述べ、環境詩学が人文学研究に広く知られるようになった。

応募者は、アメリカの環境アクティビストで詩人のゲーリー・スナイダー研究を基軸とし、環境文学、アメリカ現代詩研究、特に現代女性詩人、環境詩人、日本の環境詩へと研究範囲を広げている。環境主義の先駆者であるスナイダー作品は、環境文学における代表的なテキストとして、前述のビュエルの著作ではソローの系譜となるアメリカのウィルダネスのネイチャーライターとして生命中心主義を展開したものとして引用される。21世紀になり、環境文学研究が細分化、多様化するにつれ、スナイダー作品は、環境詩でありながら、同時に、環境正義の要素が強いと理解されるようにもなった。環境正義とは環境保護と社会正義が融合しており、環境問題における正義の実現を目指す概念、具体的には「どのように環境と関わるか」「何を食べるか」「環境に伴う人種差別をどのように解決するか」等人間と環境を取り巻く課題を深く理解することが求められる。応募者はスナイダー研究を通して、環境詩と環境正義との兼ね合いをこれまで研究してきた。

応募者は、編著『現代アメリカ女性詩集』以降、アメリカ現代女性詩人研究を継続的に行

ってきた。近年はアメリカ女性詩人たちがフェミニズム思考と環境主義を共有していることに着目してきた。ビート詩人ジョアン・カイガーは環境アクティビストとして活動し、環境詩と呼べる作品を多数残している。ブレンダ・ヒルマンは、エミリー・ディキンソン研究を起点としフェミニストでありながら、環境アクティビスト、近年は気候変動に伴う環境問題を取りあげた環境詩を執筆する。アン・ウォルドマンもフェミニストでありながら、環境との関係性を問う詩を執筆する。言語派、実験的な詩を執筆する C.D.ライト、そして、ブラックマウンテン派のチャールズ・オルソンやロバート・ダンカンの作品もジョナサン・スキナーによって環境詩学としての分析がなされている。この理由は、詩学研究において、従来の自然を前景化させた作品だけでなく、詩と物理的な環境との関係の研究が進み始めたためである。このような学術的背景に基づき、北米の日本の環境詩学の理論構築を目指す。

2. 研究の目的

本研究は、ポストモダニズム、自然環境と人間との関係を指向するエコクリティシズム、比較文学研究を方法論として、環境詩学に関する北米現代詩と日本の現代詩の全体像及び理論構築に関する基礎研究を行う。

具体的な研究目的は、第一に環境詩、環境詩学を方法論として、日本とアメリカの現代詩研究の研究成果を蓄積し、理論構築を行う。第二に、日本の環境詩・環境詩学の確立が不十分であるため、それを確立し、研究成果を研究発表、成果出版として世界へ公表する。本研究は、2つの課題を通して、環境詩、環境詩学による日米の理論を確立し、日本環境詩・環境詩学が未確立の状態を解決しながら、世界のエコクリティシズム、環境文学研究にアジアから貢献するものである。

3. 研究方法

本研究は、ポストモダニズム、自然環境と人間との関係を指向するエコクリティシズム、比較文学研究を方法論とする。

4. 研究成果

本研究は、ポストモダニズム、自然環境と人間との関係を指向するエコクリティシズム、比較文学批評を方法論として、北米現代詩の研究成果を蓄積し、環境詩学に関する北米現代詩と日本の現代詩の全体像及び理論構築に関する基礎研究を行うことにある。

新潟大学の佐々木充名誉教授が主催するオンラインでの新潟文化表現学会において、アメリカ現代詩人の C.D.ライト、ジェーン・ハーシュフィールド、日本の詩人の高良留美子について、環境詩学の観点で研究発表を行い、論文にまとめ、『アンビエンス 人新世の環境詩学』の3つの章となった。2021 The Seventh International Symposium on Literature and Environment in East Asia において、和合亮一とブレンダ・ヒルマンについて環境詩学の観点で考察をおこなった。日本アメリカ文学会中部支部 11月例会において、2020年にノーベ

ル文学賞を受賞した、ルイズ・グリュックについて「ルイズ・グリュック『野生のアイリス』における語り」として発表した。このように、環境詩学と人新世の観点でアメリカ現代詩人、日本の現代詩人について、分析、比較考証を行った。以上のように、環境詩学の考察から理論構築に向けての研究を進めた。

環境詩学理論の構築を目指す、研究発表及び論文執筆を行った。以下の通りである。共著『非日常のアメリカ文学』においては、アメリカ現代詩における非日常について、アレン・ギンズバーグ、デニス・レヴェルトフを取りあげ、非日常における抵抗について展開した。

これまで、東日本大震災に関わる災害詩を執筆している和合亮一作品を研究対象とし、環境詩学の観点で論考にまとめてきている。これと並行して、東日本大震災以後 10 年間にわたる作品について、共同研究者であるジュディ・ハレスキ教授と編集、翻訳を行ってきた。これまで米国で出版社がなかなか決まらなかった。此度、成果出版として、Since Fukushima (Vagabond Press, 2023) を刊行することができ、広く研究成果を公表することができた。2022 年度日本アメリカ文学会関西支部 9 月例会において、環境詩学の理論構築を目指す、「ロバート・ハスとネイチャー・ライティング」の研究発表を行った。『アンビエンスー人新世の環境詩学』(2022 年、思潮社) で取り上げなかった詩人を考察し、環境詩学におけるネイチャー・ライティングに関する知見を得ることができた。

2023 年 1 月、日本アメリカ文学会東京支部の研究発表部門において、「アンビエンスーブレンド・ヒルマン、和合亮一、C.W.ライトを読む」について研究発表した。以上の通り、環境詩学の理論構築に関する研究を計画通り実施することができた。

2023 年度は、研究成果のとりまとめと次の研究テーマへの準備段階となった。環境詩学の理論構築として、*Routledge Companion to Ecopoetics* に“The Work of Reconnection, Japanese Ecopoetry by Rumiko Kora and Ryoichi Wago”を共同研究者のハレスキ教授との共同執筆し、東アジア日本の環境詩学の代表として執筆した。

ハレスキ准教授の講演会を獨協大学の原成吉教授をコーディネーターとして、2024 年 2 月 18 日(金)に開催した。(場所 獨協大学 西棟 W-420 教室) 演題 “Poetic Lineage and the Dictionary Poem”、概要は、中国唐時代の詩人、李白や杜甫、日本の紫式部や松尾芭蕉といった東洋の詩的伝統が、現在のアメリカ詩人にどのような影響を与えているかを、自作の詩や同時代の詩人たちの作品を例に挙げながら論じている。

エコフェミニズムの詩人である高良留美子の詩作品を考察、検証した。高良留美子資料室において、アーカイブの収集、作品の背景を子息である竹内美穂子氏よりご教授を賜った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Ayako TAKAHASHI	4. 巻 12
2. 論文標題 Ecopoetis Approaches: Brenda Hillman and Wago Ryoichi	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of East-West Thought	6. 最初と最後の頁 5-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高橋綾子
2. 発表標題 ロバート・ハスとネイチャー・ライティング
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部9月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋綾子
2. 発表標題 アンビエンス/環境詩学を通してブレンダ・ヒルマン、和合亮一、アン・ウォルドマン、C.D.ライトを読む
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部（招待講演）
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 Ayako TAKAHASHI
2. 発表標題 シンポジウムPoetic Restoration in the Anthropocene; Attention, Grief, and Embodiment: Brenda Hillman and Wago Ryoichi
3. 学会等名 2021 The Seventh International Symposium on Literature and Environment in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋綾子
2. 発表標題 「ルイーズ・グリュック『野生のアイリス』における語り」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会中部支部11月例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Julia Fiedorczuk他 分担執筆Ayako TAKAHASHI & Judy HALEBSKY	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 436
3. 書名 Routledge Companion to Ecopectis	

1. 著者名 辻和彦, 浜本隆三編著 分担執筆高橋綾子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 284
3. 書名 非日常のアメリカ文学	

1. 著者名 Wago Ryoichi Translated by Ayako Takahashi, Judy Halebsky	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Vagabond Press	5. 総ページ数 107
3. 書名 Since Fukushima	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------